

服装の説明文にあらわれた男女の立場

丸山 和香子

はじめに

服装とは、服物を身体に着装することによって形成される「みなり」または「よそおい」のすべてをいう(注1)。このかぎりでは、男女の別なく社会生活を営む上で、不可欠なものである。

たまたま、他の目的の為に5種の小型国語辞典を検討していくうちに、風俗・服飾関係のことばでは、女性に関するものが数多く採録されていることがわかった。そこで、その内容の分析を通じて、辞典にあらわれた女性の立場をさぐろうと試みた。

5種の辞書はいずれも、中学生から一般社会人を対象とした小型国語辞典であり、研究の段階では最新版を用いている。この5種の辞典のすべての語の語釈の中に、男女または男か女かを推定できる(注3)ことばが用いられているものをひろい出し、カード化した。ここでは、服飾関係のカード約700枚を用いている。

(注1) 宮本警太郎 民俗双書24

かぶりもの・きもの・はきもの

(注2) 次のようなことばが語釈で用いられているときは、男として採集した。

君、夫、弟子、領主、天皇、士、武士、力士、漢、武者、僧、法師、君子、王、彼など。

次のようなことばが語釈で用いられているときは、女として採集した。

尼、女官など。

1 男の服装

前述のような方法で集めたものを、大きく男女にわけ、次にそれぞれを時代別にし、またその中を用途別に分類した。

1-a 明治以前の男の衣装

裃	1	衣冠	1 (注4)	桂	2	肩衣	1	紙子	1
袴	1	水干	3	素襖	2	長袴	1	直衣	2
野袴	1	直垂	2	打裂羽織	1	烏帽子	3	甲	1

<1-a表> 23例

表の見方：（ 裃 1 ）というのは、5種の辞書のうち、裃という項目の語釈の中に、男性をあらわすことばが用いられている辞書は1種であることを示す。他の4種に、裃という項目がないわけではないが、今回とりあげた基準にかなっていない場合は、数字として出てこないことになる。

（ 注 3 ）衣冠は他の22例と異り、この場合服装の総称である。

1-a 表の語釈には、「昔、……」という表現をとっているものが多く、現在は常用されていないものである。（ 注 5 ）。

（ 注 4 ）裃=昔、男子が束帯直衣姿の時、下襲の下に着た服『角川』

肩衣=武士が小袖の上に着た上着、『新明解』

袷=昔、男が直衣・狩衣などの下に着た服、『角川』

袷=男が直衣・狩衣の下に着た衣服、『新明解』

1-b 身分・職業による服装

ガウン	1	軍装	1	軍服	1	軍帽	1	袈裟	1
黒衣	1	衣(ころも)	2	締めこみ	1	浄衣	1	素絹	1
鈴掛け	1	墨染め	2	セーラー	2	僧衣(い)	4	僧衣(え)	1
道服	1	半被	1	腹掛け	1	偏衫	2	袍	1
法衣	2	法服	1	回し	2	紫衣	1	裳	1
<1-b表>			34例						

この表からもわかるように、殆んど宗教、仏教関係の服装の説明である。たとえば、「浄衣」をみると、「僧が祈禱などをするとときに着た白い衣服」『新明解』のようである。

この項で注意すべきは、同じものが、職業に伴う場合以外にも用いられていることに言及しているものがあることだ。たとえば、「衣」では「衣服の雑語的表現、（狭義では僧の着る法衣をさし、広義では、てんぷら、フライなどの回りをくるんでいるものをさす）」『新明解』とある。また、「セーラー」なども同様であるが、これはすでに辞典の語釈の項で二つに分けて記載されており、もと水平の服装であったもの（1-b項に該当）が、女子のデザイン（2-b項に該当）の一つとして定着している。『岩波』では、セーラー=水兵の服装またはそれに似せて作った、えりが大きくゆるやかな児童女学生用の衣服、とある。

1-c 平常着-和服

インパネス	1	男帯	3	角帯	1
とんび	2	二重まわし	3	兵児帯	5
平紘帯	1	振(もじり)	2	六尺	1
貝の口(注6)	1	薩摩下駄	1	<1-c表>	21例

（ 注 5 ） 帯の結び方の一つ。

1-d 平常着-洋服

アンダーシャツ	2	猿股	4	すててこ	2
ランニングシャツ	1	パンツ	1	ブリーフ	1
ウェザーオール	1	禪	3	ズボン	2
ティーシャツ	1	背広	4	背ぬき	1
ルバシカ	2	甚平	2	詰襟	1
ワイシャツ	2	三つ揃	1		

<1-d表> 31例

1-d項に属するもののうち、「ズボン」は、「おもに男子用の洋服で下半身にはくもの」『岩波』、とか「多く男子用の洋服の下半身にはくもの」『角川』とあり、男子専用のものであったのが、用途が広がりつつあることを示している。これは、「ワイシャツ」の二例の語釈にも表われている。

1-e 用途が明記してあるもの

モーニング(コート)	8	タキシード	5	燕尾服	4
フロックコート	5	<1-e表>		22例	

上の22例は、礼服、略礼服と説明されている。

1-f 付属品他

ネクタイ	1	シルクハット	2	山高帽子	1
かんかん帽	3	ミルクハット	1	革靴	1

<1-f表> 9例

1-d、1-e、1-fにまとめたものは、現在、用いられているものだが、現実の服装を網羅しているわけではないことは明らかで、現代の風俗を辞典から推量することはできない。わずかに(II)でのべる女性のものとの比較が論じられるにすぎない。

II 女の服装

2-a 明治以前の女の服装

裃	1	出衣(ぬ)	1	五つ衣	1
打ち掛け	3	攝取り	1	桂	4
上衣	1	被 ^か 衣 ^{ずき}	2	唐衣	3
小桂	1	十二単	3	ひれ 領布	1
裳	2	市女笠	1		

<2-a表> 25例

1-a表の男性の場合と同様、語釈の中に過去のものであることを表現することばが入っているものを、ここに一括した。「相」、「桂」は、1-a表にも出ており、これらが男女両方に用いられており、また語釈も、両性別々につけていることがわかる。服飾関係の資料によると(注1)、同じ名称で男女両方に用いられているものが他にもあるが、5種の辞書では、特に区別して説明しているのは、この二つの語にすぎない。

2-b 身分・職業に関するもの

女性のもので、この項に該当するものは、次の1語である。「法衣」=「僧尼の制服、僧衣」【角川】。この語釈中に、僧という語を含んでいるので、男の1-b項にも「法衣」をとりあげてある。

2-c 平常着-和服

東コート	2	江戸褌	1	絵羽(羽織)	2
コート	3	茶羽織	1	中振り	1
付け下げ	1	留め袖	4	半コート	1
被布	4	振り袖	5	訪問着	3
道行	3	引き返し	1	昼夜帯	4
名古屋帯	3	夏帯	1	腹合せ帯	2
単帯	1	丸帯	6	帯揚げ	3
帯締め	3	帯どめ	3	蹴出(し)	3
腰帯	3	腰巻	5	しごき(帯)	2
下締め	2	背上げ	1	伊達巻	5
胴締め	1	長襦袢	1	半衿	1
東下駄	1	ぼくり 木履	3		

<2-c表> 86例

この項には、和服と付属品、履物まで入っているが、男性の1-cにくらべ、とりあげている語は4倍にもなっている。

絵羽=絵羽模様のついた婦人用の訪問用の羽織、【角川】。振袖=婦人の和服の長そでまたはその着物、未婚の女性の礼装用、【新選】。というように、絵羽1、振袖5、留袖3、訪問着3、つけさげ1、丸帯2について礼装用という説明をつけている。またしごきは【岩波】と【角川】で飾りであることを明記している。

次に帯についてまとめてみる。

お太鼓(結び)	6	女結び	1	貝の口	2
下げ帯	3	だらり(の帯)	3	ふくらすめ 脹雀	3
やの字結び	3	<2-c'表>		21例	

お太鼓＝女の帯の結び方の一。太鼓の胴のように、ふくらませて結んだもの。『角川』
 脹雀＝脹ら雀が、羽を伸ばした形を文様化したもので、女性の髪型にも、若い女性の
 帯の結び方にも用いられる。『新解明』

やの字結び＝女の帯をやの字の形にむすぶ結び方。『新選』

やの字結び＝女帯をやの字形に結ぶこと、またその結び方。『角川』

以上のように、女性の場合ほとりあげている帯の種類も多く（1-c'表）、また結び
 方の説明もくわしい。

2-d 平常着-洋服

あっぱっぱ	3	単服	4	キュロット	2
アンサンブル	4	コスチューム	1	サックドレス	1
オートクチュール	1	サマーコート	1	サラファン	1
ジャンパースカート	4	スカート	4	ジレー	3
スラックス	3	スーツ	3	セパレーツ	2
チュニックコート	1	チマ	1	チョゴリ	1
ツーピース	4	トッパー	3	トップコート	1
トリアドルパンツ	1	トップドレス	1	ドレス	1
ネグリジェ	5	ノースリーブ	2	ハーフコート	2
ピキニ(スタイル)	3	パンタロン	2	ブラウス	5
プレタポルテ	1	ベスト	1	ホットパンツ	1
ボトムレス	1	ホームドレス	2	ボレロ	3
ムームー	1	ワンピース	3		

<2-d表> 83例

2-d表のものは、とくに時代の明記もなく、現在よく見聞きするものである。この
 項のスーツ3例は、『角川』『新選』『新明解』であるが、いずれも、「婦人服で上着
 とスカートが同じ布地で作ってあるもの」といった説明で、婦人用であることが明らか
 かにされている。しかし、新聞や折込みの広告をみるまでもなく、1970年代後半
 から、「スーツ」は男性用の服にも用いられている。「パンタロン」についても同様で
 ある。ところが、今回とりあげたどの辞書にも、スーツやパンタロンが広く男性用の場
 合にも用いられているという説明はなかった。これは、男性の、1-d表中の、ズボン
 やワイシャツの説明にくらべると興味深い。

2-d表から、戦後、社会的にも地域的にも、服装が平均化し、人々は好みに応じた
 服装をするようになったことがよみとれる。これに加え、下着(ランジェリー)類では、
 「ガードル」に始まり、「ランジェリー」に至る46例について、女性が着用するもの
 として語釈をほどこしている。男性の1-d関係31例に対して、女性では129例に
 も達している。

2-e 用途が明記してあるもの

アフターヌーン(ドレス)	2	イヴニング(ドレス)	3
岩田帯	3	ウェディング(ドレス)	1
セーラー服	2	カクテル・ドレス	2
ドレス	3	腹帯	2
白衣	1	ホーム・ドレス	1
マタニティ・ドレス	2	もんぺ	5
ローブ(デコルテ)	3		
<2-e表>		30例	

2-e表では、礼服の類もあり、又生活上の目的の為のものも含んでいる。白衣(ひやくえ)は法衣と同じく(2-b)に入れてもよいが、この語釈には「白色の衣服・はくい」『新明解』とあるのでこの項に入れた。

2-f 付属品他

角巻	3	肩掛け	4	ショール	2
ストール	4	ボア	3	サッシュ	1
サリー	1	シームレス・ストッキング	1	ストッキング	1
フルファッション	2	マフ	2	カッター	1
サンダル	3	中ヒール	1	ハイヒール	3
パンプス	3	ブーツ	2	ローヒール	2
御高祖頭巾	5	ターバン	3	角かくし	2
つむり物	1	トーク	1	ベール	1
ボンネット	4	綿帽子	4		
<2-f表>		60例			

衣装の一部となっている付属品には、かぶるもの、掛けるもの、はくものなど、60例にわたって説明がほどこされている。

まとめ

今、I・IIを数の上から比較すると次のようになる。

分類	性別	I (男)	II (女)
<-a>(明治以前)		23(例)	25(例)
<-b>(身分・職業)		34	1
<-c>(和服)		21	107
<-d>(洋服)		31	129

<- e> (用途別)	2 2	3 0
<- f> (付属品)	9	6 0
計	1 4 0	3 5 2

男性、女性のものを対比してみると、明治以前では、男女共にほぼ同数のものがとりあげられている。ところが、身分・職業に伴う服装の説明では、圧倒的に男性の着用したが多い。これは女性の職業の分野での活動が、つい近年までおさえられていた為、それに伴う服装がなかったか、或はあったにしても、とりあげるほど重視されなかったといえるが、おそらく前者であろう。<- c>の和服の項になると、女性の服装についての説明が多くなる。<2-c>でふれたように、和服の模様やデザイン、帯やその結び様を表現する語が多くとりあげていることは、語句そのものの存在が多かったこと、またよく用いられたことをあらわしている。それらの語は、衣服そのものの美しさや、着装の美しさを女性のものに表現して来た社会風潮を想像させるものである。本来、衣服は二つの面をもっているという。第一は、用の面であり、実用面から見たものであるが、それは風土にあうようにすること、活動に不便でないようにすること、階級をあらわすことなどが含まれる。第二は、美ということからみる面で、これには着装の美と、衣服そのものの美があげられる。(注7)。この風俗研究の立場からみても、女性の服装には第二の面の要素を多く含んでいることがわかる。職業に伴う衣装の面では、多様性を示さなかった女性も、美しさを風俗の中に生かし続け、文化の一面を担っていることが、辞書に採録された語数の多さから推量できよう。

「服装は礼装などを除いては、きわめて複雑で把握しがたいものである。しかし、ある時代のある社会には、それぞれの社会環境に通用する一定の服装が行なわれる」(注8)。というが、今回の辞書でみる限りでは、現在の社会の服装を説明する語積は少なく、揺れ動いている社会の風俗を把握することの難しさを感じさせる。

(注6) 河 籍 実 英 きもの文化史

(注7) 宮 本 馨太郎 (注1)と同じ

Ⅱ 髪型について

服装は、一般に被物・衣服・履物など一連の服物を組合せることによって構成されるが、ある服装にふさわしい髪型が当然存在すると思われるので、ここでも5種の辞典にあらわれたものを一括してみた。

3-h 男の髪

糸髪	3	いがくり	1	角刈り	1
鬘下	1	かき代	3	ジーアイ刈り	1
総髪	3	おん	1	茶筥髪	2
長髪	2	はち	1	辮髪	2
前髪立て	1	みずら	1	リーゼント	2
散切り	3	ロマンスグレー	1	髭	2
<3-h表>			31例		

3-i 女の髪

アップ	1	洗い髪	2	尻そぎ	1
銀杏返し	1	糸巻	2	おかっぱ	2
おくれ毛	3	お下げ	5	おすべらかし	4
かつら	3	かつら下	2	かもじ	2
くし巻き	1	きり髪	4	下げ髪	4
下げ前髪	4	御守殿風	1	島田	2
島田くずし	2	島田髷	2	すべらかし	1
束髪	2	高島田	3	たばこ盆	1
たばね髪	1	たば	2	たれ髪	3
断髪	2	雅児輪	1	唐人髷	2
つくも髪	1	蝶々まげ	1	日本髪	3
廂髪	2	ひつつめ	4	くらすね	1
文金高島田	2	ポニーテール	3	ポブ	1
前髪	1	丸髷	3	みどり	1
みどりの黒髪	1	耳かくし	2	桃割れ	2
夜会巻	1	結び綿	3	洋髪	2
<3-i表>			100例		

一見したところ、古代の髪型から現在のものまで、長い時代にわたっているようなので日本風俗事典と照応してみると次のようであった。日本風俗事典の髪型の項では、図と共に、それぞれの時代の髪型の名称と説明を加えている。その名称などすべてあげることは、今回は不要なので、まず、それぞれの時代に何種類の髪型を説明しているか、数のみ示す。

3-j (弘文堂：日本風俗事典による)

時代区分	男	女	児(男女)	計
原始・古代	1	6		7
古代	1	4	2	7
古代末期・中世	10	10	7	27
中世末期	6	10	4	20
近世前期	8	15	5	28
近世中期	5	15	5	25
近世後期	12	39	10	61
近代(明治)	7	16	2	25
近代(大正)	1	2		3
近代(昭和)	8	11	1	20
計	59	128	36	223

< 3-j 表 >

3-j 表の第一行目、原始・古代の欄では、男1・女6となっている。ここでは、男の髪型として「美豆良」1例のみあげており、女の髪型としては「垂髪」・「一髻」・「二髻」・「島田」・「小二髻」・「断髪」と6種をあげている。今回、検討した5種の辞書に出ている髪型のうち、「みずら」は、この原始・古代の男の髪型のことである。『岩波』では、「みずら」=日本古代の男の髪のかき方と説明している。これに対し、女の方では、「断髪」が、検討中の辞書に出ているが、『新選』では、「女性の髪型の一つ」とし、『新明解』では、「女性の髪を短く切ること。またその短く切った髪」と書かれており、時代を明記していない。一方、日本風俗事典によると、「断髪」は、古代と近代の二つの時代にあげられている。

このようなことを考慮して、5種の辞書の語釈を参考にしながら、5種の辞書にあらわれた髪型を、3-j表に挿入したものが、3-k表である。各欄の()内の数字は、3-j表の数字であり、次の髪型の名称は、3-hと3-iからとり出し各時代に分けたものである。「断髪」や「島田」のように重複するものもある。

時代区分	男	女
原始・古代	(1) みずら	(6) 断髪
古代	(1) (該当するものなし)	(4) (該当するものなし)
古代末期・中世	(10) 月代	(10) 尼そぎ (=そぎ尼)
中世末期	(6) 月代	(10) 束髪
近世前期	(8) 糸髷・揆髪	(15) 島田髷
近世中期	(5) (該当なし)	(15) 丸髷
近世後期	(12) 冠下	(9) おすべらかし(すべらかし)、高島田、結び綿、銀杏返し、切りかみ
近代(明治)	(7) 総髪、散切り、いがぐり	(16) お下げ(下げ髪)、銀杏返し、桃割れ、島田、結び綿、丸髷、束髪(たばね髪)、夜会巻
近代(大正)	(1) (該当なし)	(12) 耳かくし
近代(昭和)	(8) リーゼント、長髪、角刈り(ショート・ヘアー)	(11) 断髪、ポニーテール

最新の刊行の辞書にもかかわらず、近代(特に昭和)の欄に該当するものは、わずかしか辞書に採録されていない。これに対し、「みずら」のように最古のものをとりあげ、そのあとも各時代毎に散発的にとりあげているのは、どう理由によるのであろうか。昭和もすでに60年近くを経ており、その風俗も客観的にみることができる時期に来ている。もし、辞書が現代の要求に応えようとするならば、日本風俗事典ではすでに採録されている昭和時代の髪型をとりあげてよいのではないかと思う。それは、「ロール巻」「ペーシボーイ」「ヘップバーン・スタイル」「セシール・カット」「アイビー・ヘアー」「ビートルズ・スタイル」「アクロ・ヘア」「セミ・ロング」「レザーカット」などであり、一世を風靡したものである。

服装と同じく、髪型も女性に関するものが多くとりあげられ、説明がなされている。明治初期に出された、散髪令のように、政治の力、或は社会状況から、強制的に髪型や風俗が定められていく時期もあった。また礼装の部分には、その影響も大きく、長い期間にわたって人々を拘束している。しかし、公的立場に立つことの少なかった女性の間では、むしろ新奇なもの、より美しいものが追求され、その中からいくつかのものが定着し、その時代の風俗を作り出していったことが考えられる。女性の髪型が辞書に多く採録されている理由の一つをここに見ることができる。

以上

参考文献 和歌森 太 郎 日本の女性史
橋 本 澄 子 日本 of 髪
ミッシェル・ポーリュク 服飾の歴史
P・G・ガボトウイリョク 衣裳のフォークロア
日本風俗事典 など。